

患者が変われば 医療が変わる 医療が変われば 地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱フジキン総務部部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンの益田市移住。益田ドライブインスクール合宿型システム作りを依頼される(ガイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

第41回 健康福祉部主催「圏域別地域公聴会」から見えてきたもの

先月、地元益田市で開催された圏域別地域公聴会に参加してきた。呼ばれたのは20団体。各協議会審議会代表者、地域病

院、市町村担当者、県からは健康福祉部長ほか各課長の面々。50名を超える大所帯となった。事前に提出した質問に

希望に沿った“逝き方”出来る社会へ

沿い担当者から回答があった。行政中心の会議なので、質問も行政向けに關したものが大半だった。私たちが患者は本来、医療者向けの質問をしたのだが、残念なことにその受け手がいない。医療者側も参加していたが事務方はかりなのはうなずけない。

私がした質問は「生き方支援」に関するものだった。今後がんサロンの活動の一環として、生き方支援センター(仮称)を多職種で作り、それぞれが持っている技術力で「地域の生き方支援」の取り組みを考えている。県としてはどの課もこのテーマに取り組んではいないが、ではどの課が責任

担当課と言われればどの課でもない。

今年春ようやく担当課である「地域包括ケア推進室」が出来たがこれによって行くのかはこれからの課題。市町村にはまだそれらの受け皿はない。

後半は「地域包括ケア」について3グループにわかれてワークショップをおこなった。以前にも保健所主催の研修会でも多職種のワークショップを行ったことがあった。今回もいろんな職種の方が出た。やはり当事者中心の会話が多くなれば、具体策が出て話しが弾む。子育て、定住など課題は多いが、高齢者対策は喫緊の課題。安心して在宅療養が送れるよう支援しなければ地域医療構想は破たんしてしまう。

また市民のみならずも無関心で他人事としか捉えていない。超高齢・少子化・多死時代を迎える現実にもっと真剣に目を向けなければいけないと思う。昨年から男女共同参画公募委員となり、年数回の審議会に参加しているが、がんサロンと人権に關連が有る事に気が付いた。終末期を何処で迎えるか。本人、家族、親せきで協議する際、本人の人権を無視した対応が見受けられるのは残念。本人の希望に沿った「逝き方が出来る社会」が望ましい。

患者が変われば 医療が変わる 医療が変われば 地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱フジキン総務部部长兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンで益田市移住。益田ドライブイングスクール合宿型システム作りを依頼される(カイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

第42回 がん教育の行方

昨年来、がん教育の重要性が盛んに謳われたしている。がんに罹って20数年。がんサロンをスタートさせたのが2005年。二人に一人ががんに罹っている時代に、何を教えたらいいのか。今更がん検診やがん予防の話でもあるまい。ならば

その人自身 見る目養って

「生き方支援」の話でもしたらどうだろうか。2025年問題を控え、超高齢社会は益々進展しているのに、それを助成する「生き方支援条列」すらない。安心して看取りが出来る特別休暇もない。

数年前から近くにある石見高等看護学院3年生全員のがんサロン見学を受けている。益田赤十字病院での実習も兼ねているため、春から秋にかけて40名を10回ほどに分けて見学を行っている。最初は「患者が望む看護師とは」といった話しが中心だったが、最近は新しい手法を試している。認知症ケアのユマニチュード、精神疾患ケアのオーブンダイアログなど。がんサロンで話題にしてもおかしくはない。患者支援にはこれも役に立つ。

○先生が出版された「死を前にした人にあなたは何が出来ますか？」という書籍を読んで、そのなかの一節「支えを見つめる9つの視点」が目に付いた。そこで先日、見学の学生たちに問い掛けてみた。がんサロンに参加している患者さんたちとはもちろん初対面なのだが、「支えを見つめる9つの視点」のいくつかを使って、指名された患者から7分以内に患者治療情報をはじめその人に関する情報を聞き出すことに挑戦してもらった。普通実習中は患者のカルテをみた上で対応するため、情報を引き出すことは非常に難しい。入院中の患者治療情報は歴が主であるが、私たち患者は人としてその自身をみてほしいのだ。

何処まで出来るか不安があったが、意外に素早く対応してくれたのには驚いた。簡単に会話をしている。そのあと学生、患者双方から感想を聞いてみた。立場は違えどこれまで自己反省をする場が少ないことが分り、大いに効果があったようだ。患者として長く生かされて来て、何か役に立つことをしなければと思ったとき、看護学生とかかわれたことは本当にラッキーだった。

患者が変われば 医療が変わる 医療が変われば 地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱フジキン総務部部长兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンで益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

第43回 がん教育 その② いのちの授業

2017年10月、出雲市にて開催された島根県がん教育外部講師養成研修に参加してきた。講師はNPO法人がんサポーターかごしま理事長三好綾氏。がんサバイバ

患者・学生が双方に学ぶ

「仲間のひとりだ。」外部講師に望まれること、気をつけねばならないことについて講義があった。第1部は国のがん対策推進基本計画の概要、具体的ながん授業の準備と進行など詳細な説明。第2部はワークシヨップ。4名をグループとしてディスカッションしたが、多職種の方が混ざることが話題を豊かにすると思うと初対面の方との組みあわせなど工夫してほしかった。

そんな折ある学校からいのちの授業の依頼があった。数年前から小中学校で話しをしているが最近とくに話しくくなった。身が来た感じがする。身が回りにあまりにがん患者

が多く発言に気をつけてほしいとの申し出が多いからだ。話しをするにあたり自分が体験したことを整理してみた。

病名
告知時期
治療方法
廻りのサポーターについて
良かったこと、しんどかったこと
子供たちに伝えたいこと

こんなことを振りかえって見た。すると見えて来たことは「生きかた上手かどうか、今をどう生きるか」。誰でも病気のひとつやふたつはある。その病気に如何に正面から向き合いその人らしく生ききるかであろう。さらに「時間の大切さ」が身に迫ってくる。2度とないこの時間を如何に過ごすかを身をもって体験することになる。

私が大阪で入院していた際、妻と娘は「お父さん、あとそう長くないかもね」といっていたがその妻が先に逝ってしまったのを思い出した。人生は無情なものだ。何時お迎えが来るかは分らないが今を懸命に生きることが出来れば幸せなのだ。

前号にも書いたが看護学生との「がんサロン見学」を通じての関わりは患者からは知恵を授け、学生からは生きる気を貰い、双方が大きな学びの場となっている。

患者が変われば 医療が変わる 医療が変われば 地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱フジキン総務部部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンで益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

第44回 読書から学ぶ

私が参加しているCN K-M(中野一司先生のメーリングサイト)で在宅医療に関わる沢山の医療者の方々の声が飛び交っており、がん患者として自分の行く末についてもどうあるべきか考えさせられる事が多い。その場で沢山の本が紹介さ

本から学ぶ患者の“生き方”

れ、最近つい買ってしまった本が数冊ある。

- ・小澤竹俊先生の「死を前にした人にあなたは何か出来ますか?」
- ・二ノ坂康保喜先生の「逝くひとに学ぶ」
- ・上野秀樹先生の「認知症 医療の限界、ケアの可能性」
- ・中野一司先生の「続在宅医療が日本を変えろ」(拝受)
- ・森田洋之先生の「破綻からの軌跡」
- ・大熊由紀子先生の「誇り・味方・居場所」
- ・上野千鶴子先生の「ケアのカルスマたち」などなど(拝受)

中野先生、上野先生、森田先生は、既に地元益田市にお呼びしている。

どの先生とも面識が有るので、尚更読みたくなる。患者にとって都合のいいことばり書いてあるとは限らないからという気持ちにもなり読み漁った。

先日看護学生のがんサロン見学で、小澤竹俊先生の著書「死を前にした人にあなたは何か出来ますか」から、あるセンテンスを活用させていただき研修で使った見たが大成功だった。さらに森田洋之先生の「破綻からの軌跡」は市行政へ危機感を持って事にあたる提言に活用している。夕張市の記録が多く地元市民に危機感を持ってほしかったからだ。

渋谷長寿健康財団の大田浩右先生から1冊の書籍が届いた。「進行がん、ステージ4でも怖くない」。だがその先生とは全く面識がない。誰か仲間が私のことを教えてくれたのかもしれない。私と同じ膀胱がんを患い、闘病され寛解中とのこと。医師の視点と患者視点とはどのように違うか。興味があり、一気に読み終えた。第一に感じたことは、こんな主治医であったなら患者はどんなに有難いか。医師選びが大切とか、リンパ球を減らさないようにとか、患者本人の基本道理の努力が大切など闘病する心が書かれてあった。

「患者自身が主治医」のつもりで病気に向き合うことが必要であろう。

患者が変われば 医療が変わる 医療が変われば 地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱フジキン総務部部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンで益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

第45回 いのちの使い道

昨年のNHK大河ドラマ「直虎」を見終わった。その中で主人公直虎が直政に「戦のない国」を望み、自分の想いを託した。感動しきりだった。自分にもだれかに何かを託すものはあるかな。自分を省みて見た。

当事者の力 見せつきたい

〈2004年がんで2つの臓器を摘出〉
〈2005年全国初、がんサロンを開設。いまでは島根県下に26ヵ所にまで広がった〉
〈2006年全国初、がん対策推進条例を作り、現在35都道府県へと拡大していった〉
〈2011年〜16年まで7回がんサロン支援塾を開催し、全国にがんサロン開設、運営のノウハウをおすそ分けした〉
最近では高校の「いのちの授業」で学生と向き合った。さらに医師と同行して在宅医療も見学し、老人福祉施設も見て回った。今後、自分が見なければいけないのは何だろうと考えて見たとき、

「安心して住める街づくり」ではなかるうかと思った。
病院から送りだされた患者は安心して何処で過ごせばいいのだろう。年金だけで入れる施設などほとんどないのが現状だ。だから自宅が終の棲家とならざるをえない。

「地域包括ケア」という素敵な言葉はあるが、私の住む地域ではまだまだ生かされていない。全国を見ても安心して住める街は限られた地域のみかもしれない。

医療、介護が連携して研究会などを開き、ネットワークをはかっているが、纏まりに欠け、まだその成果は出ていない。患者として、市民として、どのようにこれに絡んでいくか。そのためにこれまでの経験値を生かし、当事者の力を見せつけるしかない。

自分たちの住む街は自分たちで作るべき。訪問看護を充実させ、介護力をどう発掘していくか。行政にばかり依存することなく、各自が出来ることを各自が行い、これを一かに纏めるかだろう。私のいのちの捨てどころはこんなところにあるのだろうか。せつかく生きていくのだから、せめてその礎なりとも築けたらいいかな。そして去りたい。みなさんも一度「いのちの使い道」を考えて見られませんか。